



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	東アジア接尾辞型諸言語における動詞屈折形式：分詞に関する問題を中心に：導入と総括
Author(s)	長崎, 郁
Citation	北方言語研究, 3, 1-10
Issue Date	2013-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52595
Type	departmental bulletin paper
File Information	01_NAGASAKI.pdf



[特集 動詞屈折形式]

東アジア接尾辞型諸言語における動詞屈折形式：分詞に関する問題を中心に
—導入と総括—

長 崎 郁

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究員)

1. はじめに

本特集では、接尾辞の添加を主要な形態法として用いる東アジアの諸言語（東アジア接尾辞型諸言語）における動詞屈折形式の分類、特に連体節述語機能を持つ形式に関する諸問題について論じる。本特集で取りあげる言語は、サハ語（チュルク諸語）、ブリヤート語（モンゴル諸語）、コリマ・ユカギール語（以下単にユカギール語、系統不明）、八重山語波照間方言（以下単に波照間方言、琉球諸語）の4言語、各言語の地理的な分布は図1の通りである。



図1 4言語の地理的分布

東アジア接尾辞型諸言語では、動詞語幹に接尾辞を付けることにより動詞屈折形式が作られる。動詞屈折形式は、チュルク諸語、モンゴル諸語、ツングース諸語を含むアルタイ諸言語の研究ではしばしば3つのタイプに分けられ、それぞれ定動詞、副動詞、分詞（または形動詞）と呼ばれる¹。このような分類は、屈折形式が動詞（あるいはその動詞を述語とする節）の統語機能を決めるという考え方によるものであり、定動詞は主節述語機能（文終止）、副動詞は副詞節述語および動詞修飾機能（連用修飾）、分詞は連体節述語機能（連体修飾）を持つものと捉えられてきた。アルタイ諸言語以外の東アジアの諸言語の研究でも、基本的に同様の考え方に基づいて動詞屈折形式の分類がなされてきたと言える。しかしながら、各言語の屈折形式の用法をより詳細に見ると、当該の統語機能のみを持つと単純には言えないケースが出てくる。特に分詞は様々な言語で統語的な多機能を示す傾向が顕著であるが、その通言語的研究は未だ少ない。本特集は、系統を異にしながら、接尾辞型言語という特徴を共有する4つの言語における動詞屈折形式の用法を洗い出すことを出発点とし、分詞をめぐる諸問題に関する議論をおこなうことにより、4言語の類似点と相違点を明らかにすることを目的とするものである。なお、分詞（participle）はしばしば形動詞（причастие）と呼ばれたり、言語や研究者により修飾形（attributive form）、動詞的名

¹ 定動詞に含まれる直説法と希求法（命令法）を別立てにして、前者を定動詞形、後者を命令形と呼び、副動詞形と分詞形（形動詞形）と合わせて4つに分類することもある（大江 1988、Janhunen 2003）。

詞 (verbal noun)、動作名詞 (action nominal)、不定形 (infinitive) と呼ばれたりもする。分詞は印欧語の伝統的な記述の枠組に、形動詞はロシア語の文法に影響を受けた用語である (亀井他 1996: 1181)。また、動詞的名詞や動作名詞、不定形は連体節述語以外の機能に注目した名付けである。本特集では、用語上の不統一から来る混乱を避けるために、便宜的に分詞で統一する。

4 つの言語に関する論文は、日本言語学会第 144 回大会ワークショップ「東アジア接尾辞型諸言語における動詞屈折形式：分詞に関する問題を中心に」(2012 年 6 月 16 日、於：東京外国語大学)での発表内容を基に、若干の加筆・修正を加えたものである。本稿は特集の導入と総括であり、その内容の多くは、各論文の内容および上記ワークショップでの議論に基づいている。本稿の導入を踏まえた上で各論文に進み、その後再び本稿の総括へ戻るという形で読みすすめていただきたい。

2. 特集への導入

ここでは、本特集で取りあげる 4 つの言語における分詞の統語機能の概略、および各論文と総括で扱う分詞に関わる諸問題について触れておく。

・4 言語における分詞は、少数の例外を除き統語的に多機能である。連体節述語以外の統語機能の分布は言語や形式により一様ではないものの、すべての言語で分詞の主節述語としての用法が認められる。サハ語、ブリヤート語、ユカギール語の分詞 (あるいは一部の分詞) は名詞節述語としての用法も持つ。これら 3 つの言語には、分詞への格接辞の付加、すなわち、名詞節述語機能を前提とした副詞節述語用法がある。また、接語の接続を条件とする副詞節述語としての用法が、ブリヤート語と波照間方言に見られる。

・上述の通り 4 つの言語すべてに分詞の主節述語としての用法があるが、その一方で、いずれの言語にも定動詞という主節述語専用の形式がある。そのため、主節述語としての分詞と定動詞には違いがあるのか、どのように違うかが問題となる。分詞を含む準動詞に関する先駆的な研究である風間 (2012) によると、ナーナイ語 (ツングース諸語) では、主節述語としては分詞が用いられるのが普通で、定動詞直説法の使用は直接体験の行為を述べる場合に限定されることから、定動詞と分詞 (風間 (2012) では形・名・動詞形) は実相 (evidentiality) の点で差異があるという。

・東アジアの諸言語の記述で用いられてきた、屈折形式が動詞の統語機能を決めるという考え方は、日本語の伝統的研究における「きれつづき」あるいは「断続」(時枝 1950) という概念と通じるものである²。これに対し、finite と non-finite の別は、元来は動詞に標示される文法範疇 (人称・数や時制の標示があるか否か) に注目した分類である (亀井他編

² 風間 (2012: 141) では、はっきりと、「アルタイ諸言語では、動詞はきれつづきによって屈折」するとされている。

著 1996: 953、Nikolaeva 2007: 1)³。すなわち、動詞屈折形式は、その「ハタラキ」に注目した分類方法と、「カタチ」に注目した分類方法があるが、4つの言語では前者がひとまず有効である。すなわち、定動詞はもっぱら「きれ」、副動詞は「つづき」の形式なのに対し、分詞は「きれ」と「つづき」を兼ねたハイブリッドであると言える。しかしながら、ブリヤート語と波照間方言には、ある種の接語が接続すると分詞が副詞節述語となるケース、すなわち、統語機能を分詞ではなく接語が決定するようなケースがある。また、波照間方言は、このような統語機能を定める接語を多く有し、分詞のみならず、副動詞や定動詞にも接続するため、屈折形式の統語機能を判断する際、いかなる接語も伴わない形式（単独形式）なのか、接語を伴う形式なのかという区別が重要である。波照間方言のような事例は、必ずしも屈折形式のみが動詞（あるいは節）の統語機能を定めるわけではない言語の存在を示唆している。

・分詞の統語機能を単純語の統語機能との関連から捉えようとする立場がある。たとえば、風間（2003: 334、2012: 159）は、通言語的に分詞がどのような機能を持つかが、その言語における形容詞の性格（形容詞名詞型／形容詞動詞型）と関連するという仮説を立てている。また、Haspelmath and Sims（2010: 257）は、分詞を「（動詞に）新たに形容詞の特徴が加わる "transpositional (word-class-changing) inflection"」と定義している。本特集で取りあげる4言語のうち、サハ語とブリヤート語は形容詞名詞型、ユカギール語と波照間方言は形容詞動詞型であるが、各言語および各タイプについて風間（2003、2012）の仮説を検証し必要に応じて見直し、また、分詞を単に動詞が形容詞化した形式と捉えられるのか検討する余地があると考えられる。

・4言語において分詞は形態論的には屈折形式として位置づけられる⁴。分詞の屈折は一種の語類転換のプロセスであり、この点で派生と共通する。動詞性を失い他の品詞としての性質を獲得する屈折を、Haspelmath and Sims（2010: 257）は上述のように "transpositional (word-class-changing) inflection" と呼び、品詞転換を伴う派生である "transpositional derivation" との違いは項構造を完全に保持するか否かにあると述べている。英語では項構造の保持と屈折／派生の区別が連動しており、例えば、屈折形式である分詞は '*Maria's criticizing Robert.*' のように目的語を通常の文と同じ形で保持するが、派生名詞では '*the examination of Fido's eyes by the vet*' のように目的語を保持することはない（ただし、of 前置詞句により結合価を保つことはある）。風間（2012: 140）にも、アルタイ型言語の準動詞（分詞を含む定形でない動詞の諸形式）が、「項構造をはじめとする動詞の統語機能をよく維持する」との指摘がある。本特集で取りあげる諸言語でも、このような項構造の保持という点から屈折と派生に境界を引くことができるのか、できない場合、どのような点から両者を区別できるのかが問題となる。

³ Trask（1993: 103）や Matthews（1997）は、文法範疇の標示の有無に機能的基準も加味した上で finite/non-finite を定義している。

⁴ 印欧語を基盤とする伝統的な定義では、分詞は動詞からの派生語とされることもある（Crystal 2001: 252）。

3. 特集の総括

以下では本特集の各論文の内容に基づき、前節で挙げた分詞をめぐる諸問題について検討をおこなう。

3.1. 主節述語としての分詞の特徴

主節述語としての分詞は、定動詞の中でも直説法と並行的に用いられるが、その用法は2つに分類することができる。

[a] 定動詞直説法のパラダイムの欠落を埋める

サハ語では、分詞現在時制が過去進行を、分詞中立時制が過去の事態についての推測を表す（江畑論文 6.1）。波照間方言では、定動詞に否定非過去形がなく、もっぱら分詞（RU分詞）の否定非過去が使われる（麻生論文 4.2.2）。定動詞直説法では表しえない意味を表すために分詞が使われると考えられる。ただし、ブリヤート語のように、定動詞直説法と分詞に明確な意味の違いがなく、日常会話においては主節述語として定動詞（過去時制および未来時制）ではなく、分詞が主に用いられるという、使用頻度によるのみ差異が認められる言語もある（山越論文 4.3）。

[b] 情報構造を明示する

ユカギール語の分詞（L分詞とME分詞）、波照間方言の分詞は、名詞項に付いた焦点標識と呼応するように現れる。すなわち、焦点標識の付いた名詞句の内容を情報構造上、価値の高い要素としてとりたてる際に分詞が使われる⁵（長崎論文 5.2、麻生論文 4.2.1）。

上記2つの用法から、4言語に共通して分詞には義務モダリティ（deontic modality）としての意味が希薄だという特徴を指摘することができる。ただし、サハ語の分詞中立時制のように、分詞が主節述語となって認識モダリティ（epistemic modality）的な意味を表すことはある⁶。いずれの言語でも、分詞に比して主節述語専用の屈折形式である定動詞に命令や意思などの意味と結びつく専用の形式がある。言語によっては、さらに定動詞直説法が義務モダリティを表す用法をもつことがある。例えば、ユカギール語では直説法1人称複数がしばしば意思・勧誘の表現に用いられ、その用法は単なる叙述以外にも広がっている(1)。

- (1) *leŋ-d-ool'-i-t* *fiŋit'e* *leŋ-u-t* *eguzu-jli*.
eat-DETR-DES-E-CVB dog_rose eat-E-CVB walk-IND.INTR.1PL
「お腹が空いたから、ノイバラの実を食べながら歩こう」

⁵ ただし、波照間方言では焦点標識と分詞の呼応が義務的ではなく、分詞のかわりに定動詞直説法を使うことも可能である。

⁶ 風間（2012）の指摘するナーナイ語の定動詞直説法（＝直接体験）と分詞（＝非直接体験）の違いも、認識モダリティと絡めて考えることができるのではないだろうか。

3.2. 接語の接続による統語機能の変化

ブリヤート語と波照間方言では、接語の接続により分詞が副詞節述語あるいは主節述語となることがある。この現象は一見したところ同種に見えるが、より広い用例の検討から、2つの言語の接語および分詞の性質に違いがあることが分かる。

[a] ブリヤート語の場合

ブリヤート語では、条件を表す接語の接続により分詞が副詞節述語になる：*zam hor-han=haa*「道を尋ねていたら」[道:INDF 尋ねる-PTCP.PFV=COND] (= 山越論文(13))。条件接語の接続は、分詞の名詞節述語機能を前提とするとと言える。この接語は名詞類にも接続するからである：*suləə-tee=haa*「暇があれば(暇持ちならば)」[暇-PROP=COND] (= 山越論文(15))。ブリヤート語・サハ語・ユカギール語では名詞節述語機能を持つ分詞に格接辞が付加されるが、ブリヤート語の条件接語の事例は、分詞への格接辞の付加と本質的に変わらないと考えられる：*tende ɔs-xɔ-dɔ=mni*「そこに私が着いたときに」[そこに 着く-PTCP.FUT-DAT=1SG.POSS] (= 山越論文(5))。

[b] 波照間方言の場合

波照間方言のはだか分詞は、条件・理由・逆接を含む前提要件を表す接語の接続により副詞節述語になる：*abaris-ja=ki*「きれいだったので」[きれい-DUR(PTCP)=REASON]、*mu=sika*「思うけど」[思う(PTCP)=逆接] (= 麻生論文(28)、(30))。また、伝聞・推量・疑問などのモダリティを表す接語の接続により主節述語になる：*nu su=kaja*「何するかね？」[何する(PTCP)=INFR] (= 麻生論文(21))。波照間方言の接語は、ブリヤート語の条件接語とは異なり、接続先の統語機能を前提として接続するとは考えられない。これらの接語は定動詞や副動詞にも接続するからである。例えば、前提要件を表す接語は副動詞や定動詞にも接続し：*en-i=ki*「言うから」[言う-CVB.SEQ=理由]、*arah-ja-n=sika*「洗うけど」[洗う-DUR-IND=逆接]、また、モダリティを表す接語は定動詞にも接続する：*sis-ja-n=sa=wa*「知っているでしょうね」[知る-DUR-IND=INFR=DSC] (= 麻生論文(29)、(30)、(27))。さらに、麻生論文によると、このような接語は数が多く、それらの使用頻度も高いため、節の統語機能の最終的な決定に、屈折形式ではなく接語が関与することが多くなる。このことから、波照間方言において実際の言語使用で屈折形式が果たす役割は、他の3言語とは異なると言えるであろう。

3.3. 分詞の統語機能と形容詞の性格との関連

風間(2012)による分詞の統語機能と形容詞の性格との関連に関する仮説とは、分詞が①名詞節述語機能を持つか／持たないか、②主節述語機能を持つか／持たないかの違いと、その言語の形容詞が形容詞名詞型か／形容詞動詞型かの違いが対応しており、「名詞述語機能あり＝主節述語機能あり＝形容詞名詞型」、「名詞述語機能なし＝主節述語機能なし＝形容詞動詞型」のような相関を示すというものである。4言語によるこの仮説の検証は次のようにまとめられる。

[a] 形容詞名詞型 —サハ語とブリヤート語

サハ語とブリヤート語の形容詞は格接辞を伴って名詞的に用いられたり、人称・数を示す接辞を伴って述語として用いられたりする。これら 2 言語の分詞はすべて名詞節述語機能を持ち、また一部の分詞に主節述語機能がある。加えて、ブリヤート語の形容詞はそのまま副詞的に働くが、分詞も副詞節述語機能をもつという事実も分詞と形容詞の統語的ふるまいの共通性を示す根拠となり得る。

[b] 形容詞動詞型 —ユカギール語と波照間方言

ユカギール語と波照間方言の形容詞の統語的ふるまいは、サハ語・ブリヤート語とは全く異なる。形容詞（正確には形容詞的な意味を持つ語幹）は動詞と同様に屈折し、そのまま名詞的に用いられることはない。しかし、波照間方言の 2 種類の分詞は主節述語機能を持ち、また、ユカギール語の 3 種類の分詞のうち、ME 分詞は主節述語機能を、L 分詞は名詞節述語機能と主節述語機能を持つ。従って、通時的な説明の可能性はあるものの、少なくとも共時的な観点からは、上記仮説が形容詞動詞型の言語にも当てはまるとは言えない。

また、形容詞名詞型の言語でも、分詞と形容詞には次のようなふるまいの違いがあり、分詞を動詞が形容詞化したものと単純にはとらえられない。

[c] サハ語の場合

形容詞はすべて COP 型の主語標識をとって主節述語となることができる(2a)。一方、分詞が主節述語となれるのは一部（中立時制と現在時制）のみであり、その主語標示は POSS 型である(2b)。

- (2) a. *bu unax ulaxan-ø*
 この 雌牛 大きい-COP.3SG
 「この雌牛は大きい」
- b. *unax uu-r kem kel-leŋ-e*
 雌牛 搾乳する-PTCP.PRES 時 来る-PTCP.NEUT-3SG(P)
 「牛の乳搾りをする時期が来たようだ」 (= 江畑論文(16))

[d] ブリヤート語の場合

形容詞はそのまま動詞修飾し、人称標識を伴うことはない(3a)。一方、分詞が副詞節述語として働く場合には、必ず所有人称接語が接続する(3b)。

- (3) a. *xordan jab!*
 速い 行く (2SG.IMP)
 「はやく（さっさと）行け！」

- b. ... *garga-ha=mni* *onta-z^ha* *bai-na*.
 出す-PTCP.PFV=1SG:POSS 寝る-CVB.IPFV いる-PRES
 「... (中略) 出したら寝ている (後略)」 (= 山越論文(17))

3.4. 屈折と派生の境界

動詞屈折形式である分詞と動詞からの派生語には、どちらも動詞性のある程度失う一種の語類転換のプロセスであるという共通点がある。両者の相違点は項構造を保持するか否かという点にあるという見方が一般的である (Haspelmath and Sims 2010、風間 2012)。しかしながら、本特集で取りあげた 4 つの言語のうち、サハ語・ブリヤート語・ユカギール語には、分詞と同程度に項構造を保持する派生語が認められた。より具体的に言えば、主語が属格となることがあるものの、目的語の格は基本的にそのまま保持されるという点で、サハ語・ブリヤート語・ユカギール語の分詞と出動名詞 (動詞からの派生語) には差が見られない⁷。以下は(4a)はサハ語の分詞現在時制、(4b)は出動名詞の例である。

- (4) a. *ontu-bu-n* *ilž-er-ber*
 それ-POSS.1SG-ACC 運ぶ-PTCP.PRES-1SG(P):DAT
 「私がそれを運ぶ際に」
 b. *xotugu* *noruot-tar* *ekonomika-laru-n* *uonna* *kultuura-laru-n*
 北の 民族-PL 経済-POSS.3PL-ACC と 文化-POSS.3PL-ACC
sajuun-nar-uuu-ga
 発達する-CAUS-NMLZ-DAT
 「北方諸民族の経済と文化を発達させることに」 (= 江畑論文(27))

その一方で、3 言語とも分詞と出動名詞では、語内部に形態的に標示可能な動詞的文法範疇に違いがあり、(5)～(7)に下線を付して挙げた文法範疇が分詞には標示できるのに対し、出動名詞には標示できない (各言語の例は、下線をつけた文法範疇すべて、あるいはその一部を標示した分詞のものである)。

- (5) サハ語：否定，時制および主語の人称・数 (上記(4a)も参照されたい)
kerexsee-betex-piti-n
 興味を持つ-NEG:PTCP.PST-1PL(P)-ACC
 「私たちが興味を持たなかったことを」 (= 江畑論文(26))
 (6) ブリヤート語：否定
id^heeluul-deg-gui=s^h
 食事させる-PTCP.HBT-NEG=2SG:POSS

⁷ より正確には、主格から属格への交替は、言語や名詞の種類により義務性が異なったりする。また、ユカギール語では目的語の格が保持されず、主格となることもある。

「お前が（第三者に）食事させないこと」（= 山越論文(11a)）

(7) ユカギール語：間接証拠、未来、主語の人称・数

t'olɔraa-die *fewrej-l'el-gele*

ウサギ-DIM 逃げる-IDEV(-PTCP)-ACC

「ウサギが逃げてしまったのを」（= 長崎論文(28)）

4. 結論

本特集では、東アジア接尾辞型諸言語における動詞屈折形式の分類と分詞に関する諸問題について考察した。

・本特集で取りあげた 4 言語の動詞屈折形式は、定動詞、副動詞、分詞の 3 つに分類する。この分類は屈折形式の統語機能に着目したものだが、定動詞と副動詞の統語機能が一義的に決まっているのに対し、分詞は統語的な多機能性を示し、特にしばしば主節に進出する。4 言語の主節述語としての分詞は、定動詞と異なり、モダリティ的な意味を持つことは稀であるという共通性がある。

・一方、4 言語の中でも波照間方言は屈折形式に加えて、屈折形式に接続する接語が統語機能を決めるという点で特異な性格を示すことが明らかになった。

・分詞と形容詞の性格との関連では、ある程度まで分詞と形容詞が結びつくが、分詞を形容詞化した動詞だとは厳密には言えないような言語と、形容詞化とはまったく言えない言語がある。

・屈折形式である分詞と派生形式である出動名詞の間には、項構造の保持という点では違いがない場合がある。両者のより明確な違いは、形態的に標示しうる動詞的文法範疇という点に見られる。

今後の課題として、本特集で得られた知見を、地理的にも形態的タイプの点でもより多様な言語の事例から検討することが必要である。

謝辞：本稿の執筆にあたり、2 名の匿名査読者から有益なコメントをいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

略号

-: 接辞境界

=: 接語境界

1, 2, 3: 人称

ACC: 対格

CAUS: 使役

CVB: 副動詞

COND: 条件

COP: コピュラ

DAT: 与格・与位格

DES: 願望

DETR: 自動詞化

DIM: 指小

DSC: 談話標識

DUR: 継続

E: 挿入音

FUT: 未来

HBT: 習慣

IDEV: 間接証拠

IMP: 命令

INFR: 推量

IPFV: 不完了

IND: 直説法	NMLZ: 名詞化	PROP: 所有
INDF: 不定	PFV: 完了	PTCP: 分詞
INTR: 自動詞	PL: 複数	SEQ: 継起
NEG: 否定	POSS: 所有者人称	SG: 単数
NEUT: 中立時制	PRES: 現在	

参考文献

- Crystal, David. 2001. *A Dictionary of Language [2nd ed.]*. Chicago: University of Chicago Press.
- Janhunen, Juha (ed.). 2003. *The Mongolic Languages*. London: Routledge.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）. 1996. 『言語学大辞典 第6巻・術語編』三省堂.
- 風間伸次郎. 2003. 「アルタイ諸言語の3グループ（チュルク、モンゴル、ツングース）、及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか：対照文法の試み」アレキサンダー・ボビン、長田俊樹（編）『日本語系統論の現在』. 京都：国際日本文化研究センター, 249-340.
- . 2012. 「アルタイ型言語における準動詞と言いさしについて」北方言語ネットワーク（編）『北方言語研究』第2号. 札幌：北海道大学大学院文学研究科, 139-162.
- Haspelmath, Martin and Andrea D. Sims. 2010. *Understanding Morphology [2nd ed.]*. London: Hodder Education Publishers.
- Matthews, Peter Hugoe, 1997. *The concise Oxford dictionary of linguistics*. Oxford/New York : Oxford University Press.
- Nikolaeva, Irina. 2007. Introduction. Irina Nikolaeva (ed.) *Finiteness*. Oxford: Oxford University Press.
- 大江孝男. 1988. 「アルタイ諸言語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）『言語学大辞典第1巻』東京：三省堂.
- Palmer, F. R. 2001. *Mood and Modality [2nd ed.]*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 時枝誠記. 1950. 『日本文法 口語篇』東京：岩波書店.
- Trask, Robert Lawrence. 1993. *A Dictionary of Grammatical Terms in Linguistics*. London: Routledge.

The Verb Inflections of Suffix-dominant Languages in East Asia
Focusing on the Problem of ‘Participle’:
Introduction and Overview

Iku NAGASAKI
(ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies)

This paper provides the introduction and overview for the special issue “The verb inflections of suffix-dominant languages in East Asia: Focusing on the problem of ‘participle.’” The special issue contains four papers on Sakha, Buryat, Kolyma Yukaghir, and the Hateruma dialect of Yaeyama Ryukyuan, respectively. The four papers analyze the verb inflection systems and morphology and function of the participles of each language. Based on the analysis of the four languages, this paper discusses (1) the characteristics of participles used as the predicates of main clauses, (2) the functional property of clitics attached to these participles, (3) the functional relationship between these participles and adjectives, and (4) the difference between the participles and deverbal derivatives.

(ながさき・いく inagasaki@aa.tufs.ac.jp)